

日本の読者へ

この本が日本語に訳され、出版されることになったことは嬉しいことだ。著者セルゲイ・ヴラソフはこの本の題名に医学的な意味だけを込めたのではないと思うし、ソ連と日本、この二つの国は隣国同士だが、まだお互いに十分に眼を向けていないと思うからだ。この本がみなさんにとってわが国が抱える問題をよりよく知るうえで、わが国の国民をより理解するうえでの助けになれば嬉しい。

この10～15年というもの、わがソ連では、日本という国について、その現実、経済活動を非常に注意深く見守っている。日本についての本はたくさんあるが、やはり私たちにとって日本はまだ謎に満ちた国なのだ。例えば私の執務室にはJVC（ビクター）、とソニーのテレビモニターが34台ありそれを使って私は手術室の様子を見ることができる。また、その時手術室の担当の医師たちと話す時にも日本製のマイクを使っている。こういった機械類は他の国のものでもよいのだが、私たちは日本製を選んでいる。というのも、「日本製なら品質は絶対信用できる」というのが定説になっているからだ。ときどき考えるのだが、こんな小さな国がこれほどの短期間にこれほどの驚くべき、他に例を見ない成功を収めることができたのはなぜなのだろうか？世界最高のカメラは日本製で、最高のコンピューターもテレビもやはり日本のものだ。なぜなのだろうか？自分の労働に対するこれほどの誠実さはどこから生まれるのだろうか？

それは経済的理由だけではないと思える。

日本を訪れた時、私はごく普通の労働者、技師、医師、経営者の働く姿に注意を払った。そして分かったことは、民族が何世紀にもわたって培ってきた道徳律の重要性である。その原則の1つは、「人は自分のした仕事の質、自分が作り出したものから満足感を得るべきである」ということだと思う。この満足感は精神的なものであり、論理的なものだ。これを民族意識が非常に高度なものであることの現れであると思える。

この特徴を私は、「技術的誠実さ」、自分の労働の成果を享有する他人に対する「敬意」と名付けたいと思う。このような才能を持つ民族でなければ、高度の、繊細で精密な技術を必要とする分野で世界一の座を獲得することはできないだろう。

自分の仕事を上手にこなす能力を持つ人々を私は常に高く評価してきた（しかも、この気持ちは年々強くなっている）。それが道路を清掃することでもコンピューターを作ることも、料理を作ることも構わない。私が勤勉な日本人、きちんと仕事をし、

その質を誇りに思える名職人をたくさん持つ日本民族を好きなのはそのためである。

眼科医をはじめとする日本の医師にも同じ気持ちを持っている。私の知っている日本人の眼科外科医には素晴らしい技量を持った人が多い。しかし、10年前初めて日本を訪れた時、いくぶん失望を感じたことも記しておきたい。日本のような先進国では、革新的な医学技術は広く普及するのが当然だと考えていた。だが、実際はそうではなかった。人口水晶体移植手術は始められたばかりだった。外科的方法による近視矯正（ついでにいうと、最初に実施したのは日本人の医師佐藤勉氏だった）はまだアイデアが熟しつつある段階に過ぎなかった。

わが国には、「ロシアの農民は鞍を着けるのには時間がかかるが、走り出したら早い」という諺がある。私には日本の医師たちは「鞍を着ける」のに長い時間をかけすぎているように思える。不思議なことに、わが国よりも時間がかかっている。

日本の医学が工業的治療方法に移行すればこういった状況も改善されるだろうし、この面では、われわれの多部門統合コンプレックス「眼科マイクロサージェリー」の活動の経験が日本の約に立つであろうと思う。これはまさに、より多くの患者をより効果的に治療するために設立された機関だからである。わが国の病院はまだこの課題を解決していないが、聞くところでは、日本で眼科にかかる可能性のある人の人数はわが国よりの多いという。したがっていろいろ考え合わせると、みなさんの国でも必ず工業的治療が導入される日が来ると思う。

われわれの研究所には世界の各地から医師が訪れてくる。私たちはそういった医師たちに最新の成果を喜んで教えているが、それが国家火睦の問題になるとは少しも考えていない。というのも、病人はあらゆる国にいるものだし、患者はその皮膚の色にかかわらず同じように苦しんでいるからである。確かに、自分が開発した方法がすぐに近くのモスクワ市内の病院よりも早く、地球の反対側で実用化されているのは残念な気がするが……。

遠く離れた日本にも私と同じ考えの人がいるというのは嬉しいことだし、一部のモスクワの同僚よりも進取の精神に富む点で私に近い人が日本にいるというのも嬉しい。

桐生市の百瀬皓博士がわれわれの病気を訪れてきたのは1972年のことだった。初めて会った時、この医師は人々に奉仕するためにできる限りのことをしたいと考えているのだということがすぐ分かった。百瀬博士は人工水晶体「スプートニク」を移植する方法をびっくりするほど早く覚え、このレンズを日本で移植するようになった。

百瀬博士はまた、緑内障手術と近視矯正手術もたちまちのうちに修得し、それを世界の大部分の医師よりも早く実践しはじめた。日本の眼科医の中にも進取の精神にあふれた人はいるのであり、私たちはこのような医師を研究所で迎えられるなら嬉しいと思う。

名古屋で私は三宅謙作博士の病院を訪れ、2人でいくつかの人工水晶体移植手術を行ったが、この思い出も嬉しいものだ。外科医三宅博士の素晴らしい技術、彼の善良さと私に対する歓迎ぶりを忘れられない。

1983年東京の奥山公道先生が近視手術R・K手術を希望し同僚の若山久先生を伴ってモスクワの研究所を訪れた。手術の効果・安全性を確認した彼らは東京代々木に近視矯正R・K手術専門クリニックを開設した。また、筑波科学万博のさい、東海大学の松前重義氏は科学者として近視矯正R・K手術やベルトコンベヤ方式手術に大変関心を持たれ、同大学の医学部の五島雄一郎教授、佐々木生五教授をはじめ、眼科の尾羽沢大教授等とともに歓迎していただいた。

日本の医師と出会い、そして一緒にした手術で、私たちが協力し合えば本当に人々の役に立てると私は確信した。それは両国だけでなく、世界全体の役に立つことができるという確信である。私はモスクワに私の研究所の付属施設として国際的な技術向上大学院を作りたいと夢見ている。世界中からそこに優秀な若手眼科医を集めて二、三年間技能向上を図らせ、他の大学院生と意見を交換した後それぞれ祖国に帰して、最も先進的で近代的な治療方法を普及させるというのがその目的だ。

眼科マイクロサージェリーは非常にデリケートで、高度の技術と大きな努力を要求する。

仕事に対して厳しい日本の医師なら、視力障害をなくするための世界的運動で重要な位置を占めるようになるだろうと信じている。私たちが住むこの世界は非常に複雑で、人は単に色だけではなく、その細かなニュアンスまで、大きな形だけではなく細かなディテールまで見分けなければならない。

そのために眼は良い方がよい。正常な視力はお互いの理解を助けるし、理解し合うことは愛し合うことだから。

スピヤトスラフ・フォードロフ

医療とペレストロイカ

—近視手術の生みの親 フォードロフ博士の人と仕事—

序文

ある賢者は、人間の一生とは人々との出会いであると言った。もしそうなら、私は非常に運がよかったと思う。これまでの自分の生涯で、私は多くの素晴らしい人々に出会ってきた。その一人がスビャトスラフ・ニコラエビチ・フォードロフである。知り合ってから14年になるが、最初の出会いから彼の情熱、その気性の激しさにびっくりした。パラドックスじみているが、彼はまもなく60歳になろうとしているのに、その活動はいささかも衰えず、歳月はただ彼に新しい力、新しいエネルギーを付け加えるだけのよう思われるのだ。彼は万事にいつも一心になって熱中し、意欲的に当たる。だから彼は幸福だ。一心になって、意気込んで、馬に乗り、自分の病院を建て、新しい器具を発明し、新しい治療法を開発する。一心になって、泳ぎ、狩りをし、ドライブし、手術し、話し、友達付き合いをし、講演し、納得しない者を説得し、信じ、愛し、生きている。

彼のこの性格はどこから生じたのか？若い時の彼はそんな人間ではなかったのだ。当時の友達たちは、フォードロフが消して他の人と違った目立つ人間ではなく、みんなと変わらず、静かにつつましく生活し、成績も普通で、ひ弱にさえ見えたと言っていた。ところが、突然……。

ところがその後、「突然」別人になったのだ。

彼はまったくの別人になった。今日、彼は世界中に知られる眼科外科医である。彼に関する映画が作られたり、本が書かれたりしている。彼はソ連医学アカデミー準会員で、ロシア共和国眼科学会の会長を務め、彼自身が創設した眼科マイクロサージェリー研究所の所長である。しかし、これはすべて結果である。理由は別のところにある。では、それは何か？

それに答えるためには、一冊の本を書かなければならないだろう。

読者が手にしているのがその本なのである。

セルゲイ・ヴラソフ

第一部 ドクター 歳月人を待たず

飛翔の試み

「フォードロフについて本を書くんですって？ 気でも違ったんですか！まず私に聞いてくれればいいのに、私は彼をよく知っています。彼は恐ろしいことを、人体実験をしているんです。彼は記事が新聞に載りさえすれば、世界中の人々の目を切ることも辞さないのですから。手遅れにならないうちに考え直して下さい！おやめなさい！」

テニスコートで私たちのパートナーになった女性の眼科医エレナ・イワノブナ（仮に彼女をこう呼ぶことにする）は私たちを学士会館のテニスコートから追い出した豪雨の音をかき消さんばかりに、夢中になって一人でこうまくし立てた。悪いことの後には良いことがあるとの諺どおり、コートの中を気ままに舞ってプレーを邪魔していたたくさんのポプラの綿毛を、雨が地面に押し付けている。きんぞく30年になる医師の彼に関する意見も傾聴に値する……。

「ところで最近のフォードロフ先生の病院に行ったのはいつでしたか？」私はエレナ・イワノブナに尋ねた。

「彼の病院になど一度も行ったことはありません」とかなり挑戦的な調子で彼女はこたえた。

「これは驚いた。彼をととてもよく知っているとおっしゃったのではないですか。人体実験なんてことをそこから聞いたのですか」

「そう言っているじゃありませんか」

「誰が？」

「誰もが？」

「一体どんな実験なのですか？具体的に話していただけませんか？」

「具体的にですって……。いいですよ。彼は眼に接着剤を入れ、患者の眼をだめにして

います」

「そうですか……」

フォードロフ研究所全体を数カ月緊張状態に置いたこの事件のことは、私もよく知っている。私は騒ぎを起こした当の医師（仮に彼をコロリョフと呼ぶことにする）から直接この事件のことを聞いたのである。

強度の進行性近視を患っている女性患者は、それまで視力が0.03あったのに、突然まったく見えなくなり、光を感じる力さえ失ってしまった。不意に痛みとひどい化膿がはじまった。医師たちは一週間もその理由を理解できなかった。ついにコロリョフが、内緒で、患者の眼に医療用接着剤のツィアクリンを注入したと認めた。この若医師の判断、つまり接着剤が固まると眼の後極が補強され、近視の進行が抑えられるだろうという考えは、論理的には正しかった。イエウサギを使った多くの実験で、この治療で実際に近視の進行を抑えることができたからだ。しかし注入量が多すぎたため、熱火傷が起こり、眼への血液供給がうまくいかなくなって、失明したのである。

コロリョフは医師の戒めをことごとく忘れていた。彼は自分が医師として一人前であり、有能であることをぜひとも証明してみせたかった。何も研究所で所長一人が有能で、パイオニアなのではなく、自分だって空高く舞い上がることができることを証明できると考えたのだ。

彼はそれを証明しようとした……。だが、彼に対して刑事訴訟が起こされた。心理が半年間にわたって行なわれた。幸いにも、患者は完全失明を免れ、以前の視力を取り戻すことができたのだが。コロリョフは解任され、現在は研究所では働いていない。コロリョフを弁護する者もいて、所長に掛け合ったが、フォードロフは聞き入れなかった。

「自分の個人的な利益に優先する医師たちには病人を治療する権利はない」若い医師の飛翔の試みはこれで終わった。

私はこの話をエレナ・イワノブナにすっかり話して聞かせた。

「そんなこと、知らないわ」と答えた彼女は、すでにそれほど挑戦的ではなくなっていた。

「フォードロフ自身が患者の眼に糊を注入したとみんなが言っているんですもの、私だ

ってそう思いますわ」

「みんなが言ってる……」——殺し文句だ。みんなが言っているので私はどんな中傷でも信じてしまう。しかしエレナ・イワノブナを厳しく責める必要はない。——われわれ自身がどんな願いを込めてか、もしかしたら満足さえして、「傑出」した人間に関する到底信じられないような噂を、まるで額面どおりに受け取ろうとすることか。このことを肝に銘じておこう。有名人に関して何か「そのような」ことを耳にし、それによって有名人を罪深い大地におとしめるのは愉快である。まるでそれがわれわれ自身を本当に高めてくれるかのようだ……。

「エレナ・イワノブナさん、あなたが『とてもよく知っている』この『恐ろしい』人間のどこが罪だというのでしょうか？」

「もうやめてください。私は彼のことを知らないし、知りたくもありません」とむっとして彼女は答えた。

会話を続けることが彼女にとって不愉快なことが分かったので、無理強いはしなかった。そうこうしてるうちに、雨は降り出した時と同じように突然やんだ。太陽が雨雲から顔を出し、モスクワ川上空に虹の橋が架かった。この、夏の夏の雨雲が空から簡単に追い散らされるように、われわれの生活から嘘を簡単に追い出すことができたなら！どんなにこの世は住みよくなり、暮らしが容易になることか……。

「それにしても」とエレナ・イワノブナはまだ納得できずにこう言った。「このフォードロフ先生というのは非人間的な人ですわ。心が氷のように冷たければ別ですが、普通の心を持っている医師が眼の手術をするために患者をコンベヤに乗せるなど果たしてできるでしょうか！よく考えてみてください。コンベヤで眼の手術なんてぞっとします！まったく考えられないことじゃありませんか……」

こういった考えを聞いたのはエレナ・イワノブナが初めてではない。すでに一度ならず同じようなことを耳にしてきた。白状すれば私自身もスピャトスラフ・ニコラエビチ・フォードロフから最初にコンベヤ方式治療のことを聞いた時、内心この彼の考えに抵抗を覚えた。それほどまでに、はじめは彼の考えは突拍子もないものに思われた。

「フォードロフ先生、それはあんまりじゃありませんか。なんだか非人道的ですよ、コンベヤに患者だなんて……」

「何年間も患者に順番を待たせることは人道的ですかね？」と彼は怒ったように言った。

私と彼はこのことについてそれ以上話をしなかったが、二年後、私は彼と一緒に「視力回復自動化ライン」と書かれたホールに入ることになった。

それは人工衛星の中の実験室か、あるいはわれわれが知らない製品を生産する未来の工場の流れ作業ラインを思わせるものだ。壮大で、謎めいていた。壁や天井、床は銀色に光っている。鈍い音とともに門が開閉し、そこから患者たちが入ってくる。患者は素人には分からない合図に従って、一人の外科医から別の外科医へと移動する。ほとんど魔術的とも言える静けさの中で、時折手術器具が触れ合う音がするだけだ……。いつの日か（数年後）、われわれはきっとこのコンベヤをフォードロフのコンベヤと呼ぶことになるだろう（もちろん、定着したらの話である）。人々は必ず、フォードロフが苦心して開発したこの治療法に彼の名を付けるだろう。そうでなければ不公平だ。それはすべてが彼のアイデアであり、最初のスケッチから完成した設備となるまで、彼がその実現に努力した。彼がこのアイデアを外国の専門家から盗んだとあえて言う者は一人もいなくなるだろう。今はまだそう言っている者もいるが。

コンベヤで一か月に約800例の手術が行なわれる。以前は医者数が同じであれば四分の一の数の手術しかできなかった。「コンベヤ患者」の合併症は1パーセント以下である。以前は七パーセントだった。一パーセントと七パーセント、その差は歴然だ。

このような質的变化を遂げることができたのは、実践の医療で初めて、手術の段階的管理原則が実現されたためである。外科医は前段階の作業が完璧に行なわれたことを確信するまで、自分が担当する手術を始めないのである。

そればかりではない。フォードロフは視力回復手術で最後から二番目に当たる手術の第四段階に、他の医師たちの作業の質をチェックすることだけの担当に第一級の外科医を付けることが必要だと考えた。第四段階担当医は、角膜の切開の深さ、または長さが必要に満たないと判断した場合に限ってメスを握る。

——最後に一番大事なことは、最も高い資格を持つ外科医が、手術全体の運命を決める主要な決定段階を担当することである。こうしてコンベヤのおかげで、最高クラスの外科医たちは従来の五倍の患者を手術することが可能にっている。——

外科治療コンベヤによって、極めて高度の装置や機械・機具をすべて最大限に活用することも非常に重要である。しかも労働時間の最初から最後までフルに使うことができる。

コンベヤによって最新の医療設備を迅速に導入することが可能になり、その設備投資費用を極めて短期間のうちに回収することができる。

「このような視力回復ラインが他に四十もあれば、全国の眼疾患手術の順番待ちをなくし、手術の効果を高めることができる。できるだけ多くの患者に周りの世界を見る力を回復し、しかもその手術の質をより高めること——私に重要なのはこのことだ。どのような方法でこれを実現するか、コンベヤによってか、あるいは別の『非人道的な』方法によってか、それはあまり重要ではない。もっともこれらの方法が、私の同僚の多くをいらいらさせるかもしれませんがね。大事なことは最大多数の最大幸福。他はどうでもよい！」とフォードロフは語る。

ブルジョワトと呼ばれた少年時代

スワーラ「スピャトスラフ・ニコラエビチ・フォードロフの愛称」は一九二七年、ウライナのプロスクロフ市で、より正確にはそこの第三騎兵連隊で生まれた。当時、福連隊長だった父は、演習に出ていて、息子の誕生のことをすぐには知ることができなかった。この知らせをもたらしたのは、「男児誕生おめでとう」と書かれたメモをP O-2機から投下したパイロットだった。

彼の記憶に生涯残った幼年時代の最初の印象は、馬の温かい息と、その震えている滑らかな鼻孔である。ついでに言えば、父のニコライ・フォードロビチは障害物競馬では常にチャンピオンの座を保ち、馬をこよなく愛し、馬についてならいくらでも話し続けることができた。この情熱が息子にも伝わったのである。

父の同志だったセミヨン・ミハイロビチ・ブジョンヌイ[革命後国内戦の武将]の長い口ひげと、そのがっしりした善良な手はフォードロフの記憶に残っている。ブジョンヌイはその手で子供だった彼を担ぎ上げて肩車させてくれたのだった。

スワーラはひ弱で病気がちな少年だった。六、七歳になっても四歳以上には見えなかった。子供たちがそんな彼をからかった。もっとも、父がフルンゼ記念軍アカデミーを「優等」で卒業し、騎兵師団長に任命され、一家の暮らし向きがよくなってからは、少し丈夫になり、成長するにつれて、それほど頻繁に病気することはなくなった。スワーラが自転車を買ってもらおうと、子供たちは彼をブルジョワと呼んだ。

フォードロフは今でもその日をよく覚えている。1938年2月28日、父は師団本部に呼び出され、人民の敵と通じたという罪で逮捕された。

母、アレクサンドラ・ダニロブナには、息子に情操教育を施す暇がなかった。生活のために金を稼がねばならず、毎晩職場からの帰宅は遅かった。スワラを教育したのは本だった。彼はむさぼるように本を読んだ。それも一度に数冊ずつ。一冊の本を読み終えないうちに、2冊目、3冊目の本を読みはじめ、それから最初の本に戻った。彼は一度にいくつかの図書館で本を借りだしたので、彼の机の上にはいつも読みかけの本が山と積まれていた。

スワラは非常に感受性の強い少年で、一冊本を読み終えると、その主人公たちのまねをしようとした。パフカ・コルチャーギナ [当時のソ連の人気女優] は長いこと偶像だった。それからジャック・ロンドン [アメリカの作家『荒野の叫び声』など] の主人公たちに夢中になった時期もあった。その気高さ、力、勇気、意志の強さ、大胆さ、危険に立ち向かう力に心を引かれたのだった。長いこと彼は長篇小説『時は待ってくれない』のハーシンに熱を上げた。その後彼のお気に入りになったのはダルタニアン [デュマ『三銃士』の主人公] だった。

概して彼が好きになったのはいつも気高い目的のために勇気をもって立ち向かうことのできるタイプだった。三銃士のような勇気と冒険心が、今もなお彼の中に生き続けている。彼は大胆な行動が好きで、がむしゃらなところもある。世間が彼のことをどのように言おうと、それが彼をうろたえさせることはない。

戦争が始まった時、14歳の彼は戦線行きを志願したが、もちろん受け入れられなかった。どこからかピストルと実弾を手に入れてきて、パルチザン部隊に加わろうとしたが、うまくいかなかった。1941年10月、ドイツ軍はすでにロストフ市に迫ろうとしていた。「ドイツ軍を誘いこんでいるのだ。あとで一挙に反撃だ！」——彼と同年代の少年たちは戦線の状況をこう話し合った。

当時フォードロフ一家はノボチェルカスク市に住んでいたが、アルメニアに疎開することになった。その途中、輸送列車が爆撃を受けた。スワラは爆弾が落ちるところを見ようと、絶えず窓から身を乗り出していた。母は彼の足をつかみ、彼を窓から引き離なそうとした。輸送列車に爆弾が命中することはなかったが、後続の輸送列車はファシズム軍によって完全に破壊された。

1945年の3月、フォードロフの人生を大きく変えた事件が起きた。彼は通っていたロストフ飛行士養成学校の学校際のパーティーに出かけようと、一張羅のよそ行きのスーツを

着込んだ。「めかし込んでいる」間に、約束の時間が迫っていることに気が付かなかった。急いだ彼は走っている電車を追い掛けて飛び乗ったが、滑り落ちた。片手で手すりにしがみ付くことができたが、彼は地面を引きずられた。運転手がスラーワに気づき、ブレーキを掛けていたのだから、電車が止まるのを待てばよかったのだ。しかし、新調のスーツを汚すまいとした彼は両足で立とうとして、車輪の下に引き込まれた。鋭い痛みが左足を貫いた……。

スラーワは病院に運び込まれた。腫の骨が砕けていることが分かった。治療して足を残しておくこともできたかもしれない。しかし、医師はすねの下から3分の1のところから切断する決定を下した。

スラーワは勝利の日を病院で迎えた。「第2マレーシエフ[第2次世界大戦時のソ連空軍の英雄]になろう」と思ったが、はっきり断られた。彼はもう飛行士養成学校には戻らなかった。若者は何になるべきか決心しなければならなかった。同級生の多くは、鉄道輸送技術大学か、工科大学へ進学した。スラーワもそう考えたことがあったが、彼はあまり製図が好きでなかったし、そもそも単調な作業を忍耐強く続けるのが嫌いだった。工科系の大学へ進学すれば、学年ごとの政策課題のために長い間机にしがみ付かなくてはならないだろうと思われた。技術系は自分には向いていない、と彼は結論を下した

では人文系の大学に進学するか？そのためには文学やその他の芸術に対して、非常に才能豊かでなければならないとスラーワは思った。

医科大学は？これもダメ、医療なんて女の職業じゃないか、とスラーワはいつも考えていた。彼がなりたいのは本当に男らしい仕事だ。しかしロストフ市には他の大学がなかった。母が反対していたので、町から出ることはできなかった。母親は一人息子の彼を溺愛し、息子と別々に暮らすことを望まなかった。息子も母を悲しませたくなかった。それでも彼は母にすまないと思っていた。北カフカス軍管区本部でタイピストとして働いていたアレクサンドラ・ダニロブナは、息子を大学で学ばせるために、毎晩アルバイトで原稿をタイプしていたのだった。

はっきり言って、医師という職業はフォードロフにとって絶望の中で行なわれた選択だった。

入学願書を提出したとき、彼は自分が18歳になっていることを信じてもらえなかった。「8年生を終えたばかりじゃないのか」——入試委員会で彼はそう言われた。

入学試験は大抵の科目は4店で合格だった。作文で3点をもらい、かろうじて通ったというところだった。だから、彼は大学でも平凡な成績しか取れないだろうと思った。しかし

実際は、授業は簡単に理解できた。抗議は聞くだけで頭に入ったので、ノートを取らなくてもいいことが分かった。

規律がやかましく、必ず授業に出席しなければならない義務教育の後では、大学は彼にとって気が向いた時だけ出ればよいアマチュアの芸術サークルのように思われた。講義中に彼は最後列でチェスをやり、一級になるほど上達した。解剖学、組織学、科学の授業には出席した。これらの科学が彼には面白かったからだ。しかしドイツ語の授業には出なかった。出なくてもドイツ語はよく分かると考えたのだった。ところが同級生が彼にこう言った。

「君は除籍処分になってるぞ」

「何だって？」

「掲示板を見てみろよ……」

彼は掲示板に飛んで行った。確かに除籍されている。「理由はドイツ語の授業を8回欠席したため……」

まさか！授業は面白くなければ出席しなくてもいいものだと思い込んでいたのだった。それが、こんなことに！

学部長のシチュエルバコフ教授は言い分を聞こうとさえしなかった。この急場を救ってくれたのは母だった。彼女はその知らせのショックから立ち直るや否や、学部長のところへ出かけて行き、永い時間彼を説得した。彼女がうまい言葉を見つけたのか、それとも彼女の魅力が効を奏したのか、いずれにしてもいい気になっていた息子の処分は撤回された。ただし、厳しい譴責処分を受け、奨学金もストップされたが。

フォードロフに昔のことについていろいろ聞いている時、私は彼が思い出話にあまり気が乗らない様子なのに気が付いた。しかし現在のことや、あるいはこれからの計画や構想について話を始めるや否や、たちまち彼は情熱家と化し、堰を切ったように話し出す。

だいぶ前に、私は彼が、「私にとって昨日という日は存在しない」と言うのを聞いた。それを聞いて私は不愉快になった。虚勢をはっているとしか思われなかった。どうしてそんなことが言えるのか。過去の誤りを振り返り、それから教訓を引き出すのが当然ではないか。そして自分を振り返り、言うてはならなかったことや、してはならなかったことに対して自分の責任を追及しなければならない。人間はそうでなければならない！と私は考えた。

今にして分かったことだが、こういった自省は彼の柄ではない。フォードロフは明日という日に生きている。彼の仕事、行動、思考は、明日に向けられている。過去に拘わらず、何か新しいものに向かって突き進むこと——これが彼の哲学だ。たとえ受け入れられない哲学であっても、それを性急に非難することはできない。自分の明日のためのいろいろな考えで生きている人間にとって、過去に関する思いは余計な荷物で、あるいは、自由を束縛するものでさえあるかもしれないし、全速力で、帆いっぱい風を受けて疾走し、前進するのを防げるだけのものかもしれない。それが正しいかどうかは誰にも分からない……。